

一人称研究を用いた自己評価の開発

A Development of Self-Assessment Using Studies on/with First-Person's Perspective

須谷弥生

Yayoi Sutani

大阪成蹊大学

Osaka Seikei University

Abstract: In formative assessment research, the importance of self-assessment, in which learners become the agents of their own assessment, has been emphasized. However, it is not easy for children to grasp their own learning status and make judgments based on it. This study therefore aims to develop a method of self-assessment using studies on/with first-person's perspective, one of the methodological approaches to bodily knowing. Through this study, it became clear that reflection grounded in bodily perceptions and sensations deepens learners' self-understanding and enables them to relate learning content to their lives. In particular, nonverbal expression through colors and shapes facilitated the reflection process, and sustained practice over time was found to enhance the accuracy of self-assessment.

はじめに

学習過程を評価する形成的評価研究においては、学習者自身が評価の主体となる自己評価の重要性が指摘されている (Earl, 2013)。しかしながら、子どもが自らの学習状況を把握し、それに基づいて自己評価を行うことは容易ではない。その背景には、ポラニー (Polanyi, M.) が指摘する、「知の暗黙の次元」が関与していると考えられる。

知の暗黙の次元は知の身体性であり、身体知③として説明される (樋口ほか, 2017)。知の一人称研究は、身体知研究の方法の一つであるため、これは自己評価が抱える課題を乗り越える可能性を有している (須谷, 2022)。そこで本研究では、一人称研究を用いた自己評価をする方法を開発することを目的とする。

一人称研究を用いた自己評価

本研究では、発表者自身が被験者となり、2021年12月から1年間、初学のフランス語を独学で学習した。学習開始前には、からだメタ認知による知覚や体感を色鉛筆で描き、言語化したうえで学習を開始し、内容のまとまりごとに同様の振り返りを行った。色と形を用いたのは、語彙が限られていても体感を表現しやすいと考えたためである。単語・文法・会話・読解・作文に取り組み、歌も教材として用いた。1年間の学習の結果、フランス語検定4級相当(学

習時間100時間および約950の語彙獲得)に到達した。

ノート分析の結果、次の三点が明らかになった。第一に、繰り返しの振り返りによって学習課題が可視化され、つまずきの把握と克服が容易になり、重点的に練習すべき箇所が明確になった。第二に、色と形による表現が振り返りの負担を軽減し、この方法を継続することで非言語的表現を用いなくても円滑に自己評価が行えるようになった。第三に、知覚や体感を描き出すことで感情が可視化され、自分の状態に気づき、学習内容を自分の生 (life) と結びつけて捉える契機となった。

考察—研究の成果と課題

知覚や体感を起点とした振り返りは、学習者の自己理解を深め、学習内容を自分自身の生 (life) と結びつけて捉える契機となることを明らかにした。特に、色と形による非言語的表現は振り返りを容易にし、一定期間の継続を通して自己評価の精度を高める効果が確認された。一方で、振り返り時に着目すべき観点、体感を言語化するための表現方法、日常的気づきの取り込み、指標 (ルーブリック) の扱いなどの課題も明らかになった。

謝辞

本研究はJSPS 科研費JP21K20250の助成による。

主要参考文献

- [1] Earl, L. *Assessment as Learning: Using Classroom Assessment to Maximize Student Learning*, second edition, Corwin; California, (2013)
- [2] 樋口聡 (編著) , 教育における身体知研究序説, 創文企画, (2017)
- [3] Polanyi, M. *The Tacit Dimension*, The University of Chicago Press: Chicago and London, (1966)
- [4] 須谷弥生, 身体知の視点から形成的評価としての学習評価を問い直す, 感性哲学, Vol.12, pp.6-20, (2022)
- [5] 諏訪正樹, 一人称研究の実践と理論—「ひとが生きるリアリティ」に迫るために, 近代科学社, (2022)